

論文

# 在朝日本人新聞メディアの社会的機能の考察

——『京城日報』主催・町洞対抗リレーを事例として——

山本彩乃

〔抄録〕

朝鮮総督府の機関紙的性格をもつ日本語新聞『京城日報』は1920年代、副島道正社長のもとで紙面の充実が図られた。他方、この時期には朝鮮で体育に対する関心が高まり、1924年、内地での「体育デー」制定に連動した動きの一環として『京城日報』主催の「京城市内町洞対抗リレー」が開催された。『京城日報』はメディアイベントとしての性格をもつこの行事を通して、「内鮮融和」や資本主義発展のための身体調教、そして帝国の統合という当時の朝鮮社会で交差する複数のイデオロギーを草の根レベルで視覚化した。さらに、その様子を情報として朝鮮全土に拡散させた。すなわち、「文化政治」期の『京城日報』は、体育競技などの「文化」によって朝鮮支配を貫徹しようとした植民地権力のイデオロギー装置であり、一見、非政治的な住民参加型体育イベントを通じて、支配イデオロギーを視覚化し、拡散する社会的機能を果たしたのである。

キーワード：京城日報、在朝日本人、メディアイベント、スポーツ、文化政治

## 序 論

1906年に発行された『京城日報』は、韓国統監である伊藤博文によって名付けられた、主に在朝日本人を読者とする日本語新聞である。朝鮮全体で流通した韓国統監府そして朝鮮総督府の機関紙的新闻であるが、同時に在朝日本人社会の主要な情報共有の空間でもあった<sup>1)</sup>。1929年時点の発行部数が26,352部で、その後も発行部数は伸び続け、1939年には61,976部発行されている<sup>2)</sup>。

1924～26年には、その京城日報社と同社傘下の毎日申報社が主催する「京城市内町洞対抗リレー大会」が開催され、日本人・朝鮮人が入り混じって多くの市民が参加・観戦した。本稿

は、この「町洞対抗リレー」というイベントを通してみた在朝日本人メディア『京城日報』の社会的機能を明らかにしようとするものである。

植民地期朝鮮の体育・スポーツを扱った先行研究には次のようなものがある。まず、植民地期朝鮮における朝鮮人が主体となって行われたスポーツ活動と民族主義の関わりについて論じた研究として、1965年に大韓体育会が刊行した『大韓体育会史』のほか、李学来や金明和の研究<sup>3)</sup>などがある。さらに、1990年代後半になると「植民地近代化論」<sup>4)</sup>の影響から、柳根直の研究<sup>5)</sup>や孫煥の研究<sup>6)</sup>が登場した。前者の研究が体育の振興が民族主義高揚に果たした役割を重視するのに対して、後者の「植民地近代化論」に影響を受けた研究は、前者のような見方を「抵抗と侵略」という二項対立図式によるものだとして批判しつつ、植民地期における日本を媒介とした体育の導入を「発展」の過程として評価している。近年では、このような「民族主義か、近代化への日本の貢献か」という両極からの単純な捉え方でなく、支配する側の「統治のテクノロジーとしての体育」と朝鮮人の「民族主義高揚のための体育」という双方の思惑が複雑に交差する様子や、体育を通じた「抵抗」と「協力」の狭間で揺れ動く競技者たちのアイデンティティを描こうとする金誠や小野容照の研究<sup>7)</sup>がある。また、統治する側の政策面から植民地期朝鮮の体育についての研究として、西尾達雄の研究<sup>8)</sup>がある。

他方、近代社会において体育・スポーツが大衆化するにあたって大きな役割を果たしたのがメディアであった。しかしながら、植民地期朝鮮の体育とメディアの関係について論じた研究は多くはない。管見の限りでは、南宮吟皓<sup>9)</sup>と森津千尋<sup>10)</sup>の研究があるのみである。このうち、南宮論文は民族主義側の新聞社主催スポーツ大会を取り上げているのに対し、森津論文は総督府側の新聞社主催の大会を主な対象としている。だが、これらの研究が対象とする野球や庭球の大会は平素からある程度訓練されたチームによって行われたものである点で共通している。これに対して、「町洞対抗リレー大会」は、普段から競技者として鍛錬しているわけではない一般市民が京城の各地域を代表して競技を行うものであり、総督府側のメディアによる身近な人々が参加する大会として、より草の根的な「統治のテクノロジーとしての体育」イベントの意味を持つものであったと考えられる。

このような観点から、本稿では「京城市内町洞対抗リレー大会」が総督府側の身近なメディアイベントとして「統治のテクノロジーとしての体育」をいかにして実現しようとしたのかを明らかにすることで、『京城日報』のもつ社会的機能の一側面を考察することを試みる。

そのために、まず第1章では主な読者層である在朝日本人について、その社会がどのようなものであったか、形成過程から概観する。第2章では在朝日本人メディアの歴史を整理する。第3章では「町洞対抗リレー」が京城で開催された背景を考える上において、当時の朝鮮における体育重視の動きや『京城日報』主催の各種スポーツ大会の概要について論じる。第4章では『京城日報』に報道された1924年11月3日の「町洞対抗リレー」に関する記事及び『京城日報』と同系列の朝鮮語新聞『毎日申報』の記事を読み解く。第5章ではそれまで

の考察をふまえながら、「町洞対抗リレー」をメディアイベントという観点から把握しつつ、『京城日報』という新聞メディアが、在朝日本人社会においてどのような機能を果たしていたのかを分析する。

以上のようにして、在朝日本人メディアとしての『京城日報』が、在朝日本人社会にとってどのような意味をもっていたのかを明らかにしたい。

## 1. 植民地朝鮮の日本語メディア『京城日報』

### 1-1. 在朝日本人社会の成立と発展

1876年の「日本人釜山渡航制限解除令」が公布されたことにより、釜山への渡航制限が廃止された。その後、日本は韓国を保護国化(1905年)し、韓国支配を安定的に行うため、移民を奨励した。居留地では、日本式の地名が付けられ、ソウルでは新町・大和町・日の出町・寿町が誕生した。

韓国併合(1910年)を経て、1914年には伝統的な行政区画を廃止し、町名を朝鮮式の「洞」と日本式の「町」に分けた。居住区のみならず、商業圏や娯楽施設にいたるまで、日本人と朝鮮人の生活圏は分かれていた。朝鮮人向けの繁華街は鍾路通であったが、日本人は南の本町通り・黄金通りであった。1920年になると在朝日本人の数は約35万人<sup>11)</sup>にのぼった。

### 1-2. 在朝日本人メディアの誕生と『京城日報』

在朝日本人社会の成立とともに、在朝日本人のための新聞が発行されるようになる。最初の在朝日本人新聞は、1880年設立された釜山商法会議所による『朝鮮新報』(1881年創刊)であった。この他にも『仁川京城隔週商報』、『朝鮮旬報』などのメディアが初期日本人居留地で発行された。以降、在朝日本人社会が形成された各都市では地方紙が発行されていたが、その主な目的は商業紙としてのものであった。

一方でこれらの新聞にはもう1つ、在朝日本人のための啓発手段としての地域新聞としての性格もあった。在朝日本人による、詐欺や暴行といった傍若無人の行為は、現地の人々の反感を買っていた。このような現地の人々の反感は、商取引をする上において支障をきたすようになったため、道徳的啓発が必要になった。そのための空間としての新聞の発行が在朝日本人の間で切実なものとなったのである<sup>12)</sup>。

1906年になると、伊藤博文韓国統監のもと『京城日報』が統監府の手により発行されるようになる。統監府の政策に批判的な新聞メディアに対して、自らコントロールする新聞で対抗することがその目的であった。

他方、当時最大の部数を誇っていた朝鮮語メディアである、『大韓毎日申報』が廃刊の状況に陥っていた。これを好機と考えた統監府は同紙を買収した。これにより、『大韓毎日申報』

は『京城日報』の姉妹紙的性格を帯びた朝鮮語新聞『毎日申報』となり、これまでは統監府や日本に批判的な新聞であったが、統監府の御用新聞となった。こうして、日本語・朝鮮語、さらに英字紙 *Seoul Press* が統監府のもとで発行されることとなり、メディア空間における日本の影響力が増大する中で、1910年に朝鮮は日本の植民地となった。

## 2. 「文化政治」と『京城日報』

### 2-1. 三・一独立運動と「文化政治」

韓国併合以前、朝鮮の各地では抗日武装闘争として「義兵闘争」が繰り返されていた。朝鮮総督府は、義兵を弾圧しつつ朝鮮支配を円滑に実施するため、「武断統治」と呼ばれる強圧的な統治を行った。

だが、1919年に三・一独立運動が発生したことにより、総督府は統治のあり方を変更する必要性を痛感するようになった。そこで、1920年代になって登場したのが、総督府が自ら「文化政治」と呼んだ新たな統治方式である。

朝鮮には新たに齋藤実総督が就任し、制度改革を行いつつもこれまでの強圧的支配を維持し、同時に一定の自由を朝鮮人に認めて朝鮮人を懐柔し、親日勢力を育成しようとした。

### 2-2. 「文化政治」下の『京城日報』

そのような中、1924年8月に齋藤総督の後ろ盾により、副島道正が『京城日報』の社長として就任した。副島は、明治の元勲・副島種臣の三男として1871年に東京で生まれ、ケンブリッジ大学政治学科を卒業し、日本に帰国して経済活動を行うとともに、1918年には貴族院議員となって政界でも活動した人物である。

副島社長のもとで『京城日報』は、それまで主に朝鮮の問題をあつかうものから、世界情勢や日本内地の情勢、さらにはより大衆向けする文化・生活記事などを加えた多彩な内容を扱う在朝日本人にとって身近な新聞へと変化していった<sup>13)</sup>。そのような方針転換の中で行われたのが、「町洞対抗リレー」である。

## 3. 体育の重視と『京城日報』

### 3-1. 「体育デー」と朝鮮における体育の重視

「町洞対抗リレー」開催の背景には、『京城日報』の経営方針の転換のみならず、日本内地で文部省が定めた「全国体育デー」の存在もあった。

「全国体育デー」は、1924年9月22日に文部省が次官名により、各地方長官に向けて「全国体育デーに関する通牒」を出したことに始まる。これは、11月3日を「全国体育デー」と

するもので、その目的は地方の状況を鑑みながら体育を奨励し、運動競技を通じて道徳性を育むことであった<sup>14)</sup>。

他方、それ以前の1919年には朝鮮における体育の促進を目的とした日本系体育団体「朝鮮体育協会(朝体協)」が創設されていた。朝鮮体育協会は『朝鮮新聞』が中心となり結成されたものであるが、やがて『京城日報』も関わるようになった。また、1920年に民族系体育団体の「朝鮮体育会」が『東亜日報』などの後援により創設された。このように、「文化政治」期は朝鮮において、さまざまな立場の人たちによって体育団体が結成されて体育が重視されていた時期であり、そこに日本語新聞の『朝鮮新聞』・『京城日報』、民族系の朝鮮語新聞『東亜日報』といった新聞社が関わっていたのである<sup>15)</sup>。

日本内地の「全国体育デー」が、「文化政治」を唱える総督府の方針、さらに朝鮮社会における体育の重視と相まって、朝鮮でも積極的に取り入れられたものと考えられる。第1回「体育デー」となった1924年11月3日には、日本の各都市で関連行事が行われたが、京城においても訓練院に28校約2万人の児童が集う京城府主催「聯合運動」が行われ、奨忠壇では女学生による大綱引き大会が行われるなど、各種の体育行事が行われた<sup>16)</sup>。

### 3-2. 『京城日報』が主催するスポーツ大会

[表1]は1920年代に行われた『京城日報』主催のスポーツ大会をまとめたものである。1920年と1921年には「全鮮スケート大会」と「女学生庭球大会」のそれぞれ一大会が開催されたに過ぎなかったが、その後徐々に増えはじめ、「体育デー」が制定された1924年以降は『京城日報』が主催するスポーツ大会が、活発に行われるようになっていく。

競技主体は、「京城市内各町洞対抗リレー」を除いて、朝鮮に住む学生・選手、内地・朝鮮以外の外地・外国から招致した学生、スポーツ選手であり、競技する者と観客がはっきり分かれた観覧型のスポーツ大会・競技が中心であった。

表1 『京城日報』主催のスポーツ大会・スポーツ関連行事(1920年代)

年	月	種目	大会・行事名
1920	2	スケート	全鮮スケート大会
1921	10	テニス	女学生庭球大会(朝体協主催・京城日報後援、第1回)
1922	4	長距離走	京釜間長距離走行
	9	野球	全奉天軍招聘試合
	10	テニス	女学生庭球大会(第2回)
1923	5	野球	天勝野球団招聘試合
	6	リレー	京仁間長距離リレー競走
	8	野球	神戸高商招聘試合
	10	テニス	女学生庭球大会(第3回)

在朝日本人新聞メディアの社会的機能の考察（山本彩乃）

1924	8 9 9 10 10 11	野球 野球 テニス 野球 テニス リレー	京都大学野球部招聘試合 全鮮野球争覇戦（第1回） 全鮮庭球選手権（第1回） 長崎高商野球部招聘試合 女学生庭球大会（第4回） 京城市内各町洞対抗リレー
1925	4 5 6 6 8 10 10 11	テニス 講演会 展覧会 テニス 野球 野球 テニス リレー	全京城－全大邱 運動講演会 各国運動展覧会（三越） 全鮮庭球選手権（第2回） 全鮮野球争覇戦（第2回） シカゴ大学野球軍招聘試合 女子庭球大会（第5回） 京城市内各町洞対抗リレー
1926	6 7 8 10 10	テニス 野球 野球 リレー テニス	全鮮庭球選手権（第3回） 廣陵中学校野球軍招聘試合 全鮮野球争覇戦（第3回） 京城市内各町洞対抗リレー 女子庭球大会（第6回）
1927	1 6 6 6 7 8 10 10 11	講習会 野球 テニス テニス 野球 野球 リレー 野球 テニス	「黒人野球団（フレズノ・ローヤル・チャイアント）」招聘試合 全鮮庭球選手権（第4回） 女子庭球大会（第7回） 大毎野球団招聘試合 全鮮野球争覇戦（第4回） 全鮮都市争奪リレー 大連実業団招聘試合 明治神宮競技大会女子庭球凱旋試合 体操、遊戯、競技講習会
1928	5 6 6 6 8 8 9 9	ラグビー テニス テニス 野球 野球 野球 講演会 講演会	全鮮ラグビー選手権大会（第1回） 全鮮庭球選手権（第5回） 全鮮女子庭球大会（第8回） 南カルフォルニア大野球軍招聘試合 東京帝国大学野球部招聘試合 全鮮野球争覇戦（第5回） 加納治五郎講演 人見絹枝嬢講演会
1929	4 6 8 8 10	テニス テニス 野球 野球 野球	全鮮女子庭球大会（第9回） 全鮮庭球選手権（第6回） 早稲田大学野球部招聘試合 全鮮野球争覇戦（第6回） 早慶野球戦映画公開

※本図は森津 [2011:94] をもとに、再構成したものである。

## 4. 京城日報社が主催する「町洞対抗リレー大会」

### 4-1. 「町洞対抗リレー」の特質

「町洞対抗リレー」は京城で暮らしていた日本人・朝鮮人の若者たちが参加していた。参加者の職業も次項で詳述するように多様で、店員や学生など、ほとんどが一般の人々であった。このことから「町洞対抗リレー」は、一般市民向けに門戸が開かれた参加型のスポーツ大会であったことが分かる。また、地域に住む身近な人々が参加することにより、観戦する市民の側も競技をより身近に感じることでできる地域密着型のスポーツ大会であった。

### 4-2. 「町洞対抗リレー大会」の概要

第1回「体育デー」に行われた「町洞対抗リレー大会」は、『京城日報』と『毎日申報』の日朝両言語の姉妹紙による共同主催であった。京城の同じ町・洞に住む住民がチームを構成し、甲組と乙組に分かれてリレーを行い、順位を競った。『毎日申報』(1924年11月4日)によると、総参加者数は二百数十名にのぼったという。

入賞した町・洞は、甲組が1位武橋町、2位鍾路4丁目、3位禮智洞、4位西小門、5位天然洞、一方の乙組の1位本町1丁目、2位旭町1丁目、3位永楽町、4位古市町、5位大和町1丁目であった<sup>17)</sup>。入賞者の地区から推測すると、甲と乙はそれぞれ隣接する地域で分かれており、その境界は武橋町などの西部地域を例外として、現在の乙支路(ウルチロ)周辺でおおよそ南北に区切られていた可能性が高い。

次に、『京城日報』(1924年11月4日)の報道から、入賞者たちの属性をみてみよう。

まず、民族別の構成をみると、甲組の入賞者は日本人7名、朝鮮人24名、乙組の入賞者は日本人25名、朝鮮人4名であった。朝鮮人が多く居住する北部地域の甲組では朝鮮人が多く、日本人が多く住む南部地域の乙組は日本人が多いことから、民族によって居住地域が分かれていた当時の京城の様相をそのまま反映した構成となっている。

職業構成では、甲組の日本人入賞者は学生2名、会社員2名、商業2名、官吏1名、朝鮮人は学生16名(うち7名は東本願寺(真宗大谷派)が経営する教育機関・向上会館の学生)、店員7名、職工1名であった。乙組の入賞者では、日本人は青年会会員が7名、学生11名、商業6名、不明1名であった。朝鮮人は青年会会員が4名となっている。

コースは武橋町の京城日報社前をスタートし、朝鮮人が多く居住する鍾路4丁目→禮智洞→昌慶宮→東大門と巡ったのち、日本人が多く住む黄金町4丁目→同2丁目を経て、南大門に向かい、再び武橋町の京城日報社前に戻ってゴールをするという、当時の京城市街地を一巡するものであった。競技の順序としては、最初に甲組からスタートし、甲組のリレー競技が終わると乙組のリレー競技がスタートした。

副賞として革製のカバン、タオル、菓子、ゴム靴、置時計、万年筆、シーツ、バンド、ネクタイ、ハンガーといった商品が、各商店より提供されていた。ただ、それぞれの商品がどのランクの入賞者に配分されたのかについては、紙面から知ることはできない。

町洞が対抗して当時、非常に高価であったゴム靴などの商品を獲得するために競ったことから、「競争」の側面を有していたともいえるが、「朝鮮神宮競技大会」のような上位の大会への直接の登竜門となるようなものでなく、やはりこの大会の性質は「地域親善」の要素がメインだったといえるだろう。

#### 4-3. 『京城日報』と朝鮮語新聞『毎日申報』の報道

##### 4-3-1. 日本語新聞『京城日報』の報道

『京城日報』は大会の様子を写真入りで大きく報じている。その冒頭は、以下のように大会がスタート時点から大いに盛り上がっていたことを伝える内容となっている。

体育デーを飾った 朝鮮未曾有の大壮挙

予期以上の効果を収めた 本社主催 町洞対抗リレー競走

昨日の体育デーを飾る一大壮挙として、全市民から熱狂的の期待を受けた本社主催の京城市内各町洞対抗リレー大会競走大会は、果たして市民の期待に背かず第盛況裡に終始した。此日の出場選手は予報の如く、甲乙合はせて卅二組二百名に上つたが、正午から各選手は或は青年団の団旗を翳し、或は応援旗、町洞旗等を翳し、各応援団に擁せられて続々本社に集合し、一方、社前は刻々に観衆を以て埋められ、スタートの白線が鮮かに光つて競技前の空気は愈々熟して来た。

（『京城日報』1924年11月4日。旧漢字は新漢字に改め、句読点は筆者が付した。）

「予期以上の効果を収めた」という見出しからは、主催者である『京城日報』さえも予想しなかったほどの盛り上がりを見せたことをうかがわせる。

さらに、競技の結果に続いて、審判委員長であった坪井豊彦の言葉が掲載されている。

「慥かに大成功です 審判には遺漏はない」

審判委員長 坪井豊彦氏語る

今回の催しは全国体育デーを記念する民衆体育の第一歩として、実に時機に適した催しであり且此第一回の企てが、短時日の間に斯く遺憾なく大成功裡に終了したことは非常に愉快であります。選手の資格審査、又は競争上の準備、応援団の節制等に至つては遺憾な点もありましたが之は学校競技などと違つて非常な困難な事であるから、先づ今回の挙は第一回としては大成功と云わねばなりません。審判は最も厳正に、規則に準拠して行つたの



であるから遺漏はないと信じます。最後市民諸君が斯うした意義ある体育に充分の理解を持ち今後は奮つて参加されんことを切望して置きます

(『京城日報』1924年11月4日。旧漢字は新漢字に改めた。)

大会が成功した一方で、「選手の資格審査、又は競争上の準備、応援団の節制等に至つては遺憾な点もありました」とあるように、いくつかの問題が生じていたことが分かる。大会の様子を伝える記事でも、寿町・長谷川町・南大門通2丁目の3組が失格となったことが報じられており、詳細は不明なもの何らかのトラブルが発生したことをうかがわせる。

続いて掲載されているのが、主催する京城日报社と毎日申報社からの「謝辞」である。

#### 謹謝

本社主催各町洞対抗リレー競走挙行に際し終始多大の御援助を賜はり御蔭を以て予期以上の盛況で意義ある効果を取め無事閉会いたしました事は感謝に堪へませぬ、茲に大会終了に当つて町洞総代、出場選手、審判員、其他関係各位へ謹んで深謝致します

京城日报社

毎日申報社

(『京城日報』1924年11月4日。旧漢字は新漢字に改めた。)

リレー大会が京城の各町・洞の総代をはじめ地域ぐるみで協力して開催されたものであることがうかがえる。「町洞対抗リレー大会」は文字通り地域密着型スポーツ大会であった。

#### 4-3-2. 朝鮮語新聞『毎日申報』の報道



写真1 『毎日申報』1924年11月4日

このリレー大会は、『京城日報』だけではなく、大会を共催した朝鮮語姉妹紙『毎日申報』にもおいても大きく報道されている。『毎日申報』では、11月4日・5日と2日間にわたって「町洞対抗リレー大会」の記事が掲載されていた。うち、11月4日付の記事はスタート時の様子のみが伝えられている。11月5日付の記事では、大会の結果を伝える前日の『京城日報』の翻訳記事が大半で、『京城日報』と同様の「謝辞」も朝鮮語で掲載されている。朝鮮人が多く居住する「洞」地域の総代ら関係者に向けて掲載されたものであろう。

注目すべきは11月4日付『毎日申報』に掲載された写真(写真1)である。これは、『京城

日報』には掲載されていないもので、本社前に巨大な旗が掲げられ、多くの人々が集まった様子からは、この大会が壮麗な大会であったことをうかがい知ることができる。

## 5. メディアイベントとしての「町洞対抗リレー」の意義

### 5-1. メディアイベントとしての「町洞対抗リレー」

「町洞対抗リレー」は、新聞社が主催するとともに、新聞紙上で共有されることでイベント化されたメディアイベントとしての性質を持つものであった。すなわち、社会的機能の側面からみれば、リレーというスポーツ競技によって、総督府官営メディアである『京城日報』が民族や職業を超えて京城の市民を結びつけ、京城に在住する日本人・朝鮮人を総督府の秩序の下に統合しようとするものである。前章でみたように、大会には多くの観衆が詰めかけ、応援の過程でトラブルも発生している。身近な存在である町洞の代表たちがランナーであるがゆえに、彼らを熱心に応援することになり、それが京城の住民たちを魅惑した。このような統合形態は、「文化政治」を掲げる総督府の方針と合致するものであるといえるだろう。

タルドによると、新聞メディアを通して、時間と場所を共有するだけの「群衆」とは異なる、情報を共有し、心理的な繋がりを持つ「公衆」が形成されるとされる<sup>18)</sup>。しかし、この場合には、さらにこのメディアイベントに参加する人・観戦する人々といった、新たな統合された「群衆」を『京城日報』が作り出したのである。

当時の在朝日本人は日本各地から集まっていたが、定着して朝鮮生まれの日本人も誕生するようになっていた。リレーというメディアイベントを通して作り出された「群衆」は、そのような在朝日本人に対し、大会での応援で使われた各町の町旗のもとで住民が一体となった応援を通して、植民地朝鮮に住む地域住民としての自覚を促すこととなったであろうと考えられる。

また、日本人と朝鮮人がともに競技に参加したという点も見逃せない。次に、これについてみていこう。

### 5-2. 「内鮮融和」を体現する体育競技の奨励と「町洞対抗リレー大会」

実は、1910年代の朝鮮総督府は体育競技において日本人と朝鮮人が競うことを好ましく思っていなかった。そのことを象徴するのが、現在の全国高校野球の前身である全国中等野球大会の地区予選を第2回大会（1916年）の段階で、朝鮮でも開催しようとした際の総督府学務局の対応であった。当時、主催者の大阪朝日新聞社は野球などの競技を通じて日本人と朝鮮人を交流させた方が両民族の融和を早めると主張した。これに対して総督府学務局は、競技によって日本人に対する「競争心」や「敵愾心」が生じ、朝鮮人に「対立的観念」が生まれることを懸念して、朝鮮地区予選を中止させている<sup>19)</sup>。つまり、この時期の総督府は、日本人と朝

鮮人が体育競技で競うことを治安上、好ましくないと考えていたのである。

ところが、三・一独立運動直後の1919年末には日本人学校と朝鮮人学校との野球の試合が許可されるようになる<sup>20)</sup>。その後、1920年代になると、「文化政治」のスローガンである「内鮮融和」を体現するものとして、日本人と朝鮮人がともに体育競技に参加することがむしろ奨励されるようになっていく。

総督府官営メディアである『京城日報』はその流れの中で、1920年5月7日の紙面に「お花見や運動会で内鮮融和の欣ばしい現象」と題した記事を掲載し、「内鮮融和は予想以上の好成績」をあげつつあると総督府の「文化政治」を賛美している。運動会で日本人と朝鮮人がともに競技・観覧する姿そのものが「内鮮融和」の成果だという受け止めである。また、1925年に本社において主催した体育に関する講演会の内容を報じる中で、講師の「私は今回朝鮮各地を巡回して朝鮮の青年と内地の青年が夫々共に運動場に集り共存共栄の実を挙げてゐるのを愉快に思つたのである。内鮮間の色々の問題の解決と共存共栄は殊に運動家の力に俟つところが多い」という言葉を紹介している<sup>21)</sup>。つまり、「内鮮間の色々の問題の解決と共存共栄」すなわち「内鮮融和」の体現を日本人と朝鮮人がともに参加する体育競技に見ている。

### 5-3. 身体を通して視覚化される複数のイデオロギー

「町洞対抗リレー大会」は、当時の植民地朝鮮の社会において交差する複数のイデオロギーが競技に参加する者、そして応援する観客の身体を通して視覚化されたものであった。そのイデオロギーとは①植民地統治のイデオロギー（「内鮮融和」）、②資本主義社会における身体調教のイデオロギー、③帝国統合のイデオロギーの3つである。

まず、①の植民地統治のイデオロギーについては、すでに前項で述べた通りである。

次に②の資本主義社会における身体調教のイデオロギーである。1910年代までは総督府の方針もあり、朝鮮では工業化が抑制されてきた。だが、1920年代に入ると、徐々に規制が緩和されたこともあって安価な労働力と市場を求めて日本資本が朝鮮に進出するようになり、植民地工業化が進展し、都市部ではホワイトカラーが増加しつつあった。このような中、朝鮮でも近代資本主義に適合する身体の規律化が要求されるようになった。リレーは、参加者がルールに従って決められたコースを走り、正確に時間を計測することで競技が成立する。つまり、『監獄の誕生』でフーコーがいうような、身体調教を通じた規律化のテクノロジーとしての性格を有している。資本主義が発展しつつあった1920年代の朝鮮における規律権力が、多くの市民の身体を通して視覚化されたのが「町洞対抗リレー大会」だったのである。

続いて、③の帝国統合のイデオロギーについて考えてみたい。明治前期の日本は、富国強兵政策のもと、軍事化と産業化の担い手を育成することを目的として体育教育を制度化していった。さらに、19世紀末には日清戦争の勝利によって帝国主義国家としての性格を強め、社会ダーウィニズムの立場から他の帝国主義国家との競争に耐えうる人材育成の手段として、体育

教育を推進するようになった<sup>22)</sup>。しかし、これらはあくまで日本人を対象としたものであって、特に軍事化については徴兵の対象外であった朝鮮人や台湾人に対して要求されることはなかった。ところが、1920年代になって日本本国政府により「内地延長主義」の方針がとられるようになり、植民地も含めた帝国の統合が意識されるようになった。そこで活用されたのが体育競技で、日本初の全国的スポーツ大会「明治神宮競技大会」には朝鮮・台湾・関東州の代表選手が参加した。これは、この大会が、帝国を統合するものであったことを物語っている。

この「明治神宮競技大会」のような全帝国レベルでのイベントのほか、当局が主導して草の根レベルで体育競技への関心を高め、これを奨励することは、体育競技を手段とした帝国統合を末端まで徹底する上で欠かすことができない。すなわち、官営メディアによる「町洞対抗リレー大会」は、体育を通じて植民地をも包摂する帝国統合のイデオロギーを地域社会レベルで視覚化したものであるといえるだろう。

以上のような社会的・政治的文脈の中で開催された「町洞対抗リレー大会」は、「内鮮融和」や資本主義発展のための身体調教、帝国の統合という極めて政治的なイデオロギーを視覚化したものであり、さらにメディアを通じてこれを拡散させるものであったといえるだろう。

## 結 論

『京城日報』は「京城市内町洞対抗リレー」を開催することを通して、「内鮮融和」や資本主義発展のための身体調教、そして帝国の統合という当時の朝鮮社会で交差する複数のイデオロギーを草の根レベルで視覚化した。さらに、その様子を情報として朝鮮全土に拡散させた。

すなわち、「文化政治」期の『京城日報』は体育競技などの「文化」によって朝鮮支配を貫徹しようとした植民地権力のイデオロギー装置であり、一見、非政治的な住民参加型体育イベントを通じて、支配イデオロギーを視覚化し、拡散する社会的機能を果たしたのである。

### 〔注〕

- 1) 李相哲『朝鮮における日本人経営新聞の歴史（1881-1945）』角川学術出版、2009年、p.98。
- 2) 「植民地時期日本人発行新聞解題」韓国・国史編纂委員会韓国国史データベース、[http://db.history.go.kr/download.do?levelId=npbs&fileName=intro\\_npbs.pdf](http://db.history.go.kr/download.do?levelId=npbs&fileName=intro_npbs.pdf)（2020年11月15日最終閲覧）。
- 3) 李学来『韓国近代体育史研究』知識産業社、1990年及び金明和「韓国近代女性体育に関する研究」淑明女子大学校修士論文、1990年。いずれも韓国語。
- 4) 民族主義史学を批判して、植民地支配が近代化を促進した側面を強調し、評価する立場。
- 5) 柳根直「日本植民地統治下韓国における初等学校体育制度に関する歴史的考察」、『体育史研究』14、1997年。
- 6) 孫煥「戦前の在日朝鮮人留学生のスポーツ活動に関する歴史的研究」筑波大学博士論文、1999年。
- 7) 金誠『近代日本・朝鮮とスポーツ：支配と抵抗、そして協力へ』塙書房、2017年及び小野容照『帝国日本と朝鮮野球：憧憬とナショナリズムの隘路』、中央公論新社、2017年。
- 8) 西尾達雄『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』明石書店、2003年。

- 9) 南宮吟皓「日本統治期朝鮮における東亜日報社主催女子庭球大会(1923-1939)に関する研究:大会創設の経緯、概要及び報道の役割を中心に」、『スポーツ史研究』13, 2000年。
- 10) 森津千尋「植民地下朝鮮におけるスポーツとメディア:『京城日報』の言説分析を中心に」、『スポーツ社会学研究』19-1, 2011年。
- 11) 『朝鮮総督府官報』第2779号附録(1921年11月16日発行)によると、1920年末時点で在朝日本人の人口は347,850人であった。
- 12) 李相哲前掲, p.40。
- 13) 森山茂則「新聞と総督政治-『京城日報』について」、大江志乃夫他編『岩波講座 近代日本と植民地 第7巻 文化のなかの植民地』岩波書店, 2005年, p.15。他方、識字率の上昇による読者層の拡大も紙面が変化した背景として考えられるだろう。
- 14) 門脇正俊「『体育の日』50年とその前史:実施過程、意義や課題を各紙社説・報道等から振り返る」、『北海道教育大学紀要』67(1), 2016年, p.3。
- 15) 森津前掲を参照。
- 16) 『京城日報』1924年11月4日。
- 17) 『京城日報』1924年11月4日、『毎日申報』1924年11月5日。
- 18) G・タルド著、稲葉三千男訳『世論と群衆』未来社, 1969年, p.14。
- 19) 小野前掲, pp.143~146。
- 20) 同上, p.152。
- 21) 『京城日報』1925年5月29日。
- 22) 入江克己『日本ファシズム下の体育思想』不味堂出版, 1986年, pp.20~25。

〔参考文献〕

『京城日報』・『毎日申報』

李相哲(2009)『朝鮮における日本人経営新聞の歴史(1881-1945)』角川学術出版

金誠(2017)『近代日本・朝鮮とスポーツ:支配と抵抗、そして協力へ』塙書房

小野容照(2017)『帝国日本と朝鮮野球:憧憬とナショナリズムの隘路』中央公論新社

西尾達雄(2003)『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』明石書店

高崎宗次(2002)『植民地朝鮮の日本人』岩波新書

橋谷弘(2004)『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館

森山茂則(2005)「新聞と総督政治-『京城日報』について」『文化のなかの植民地』第7巻, 岩波書店

門脇正俊(2016)「『体育の日』50年とその前史:実施過程、意義や課題を各紙社説・報道等から振り返る」、『北海道教育大学紀要』67(1)

森津千尋(2011)「植民地下朝鮮におけるスポーツとメディア:『京城日報』の言説分析を中心に」、『スポーツ社会学研究』19-1

入江克己(1986)『日本ファシズム下の体育思想』不味堂出版

(韓国) 国史編纂委員会韓国国史データベース <http://db.history.go.kr>

(やまもと あやの 佛教大学非常勤講師)

(指導教員:大谷 栄一 教授)

2020年9月30日受理